

## “硫磷16号” (チッソ) 1本体系で7年間

### “宇佐米” 増収に成功した院内町農協

河 見 泰 成

#### うまい“宇佐米”の主産地

##### 院内町とは、どういうところか

“水稻作、麦作の施肥合理化対策として、それまで基肥2銘柄、追肥2銘柄の肥料を使っていたのを、41年度からは基肥を当社の硫磷16号（硫加磷安16号=10・20・20）1本にしぼり、今年まで7年間、完全に1銘柄で基肥の施肥体系を続け、更に今年からは追肥も、これまでのC3号に代って当社の磷加安454号1本にしぼった農協さんが大分県にあるのです。商売のことですから、10年、20年というお交際（つきあい）はザラにあるでしょうが、院内町農協さんのように、7年間にもわたって水稻、麦作用の基肥施肥体系を1社1銘柄にしぼって推進された事例は聞いておりません。しかもそれだけでなく、“硫磷16号がよく院内町管内の生産農家のご期待にこたえまして、41年以後単位当たり収量も尻上りに増えております。そのうえ有難いことに、今年からは従来のC3号に代り、これまた当社の磷加安454号で推進するという、愉快的なニュースがあるのです。”

だから“大分県宇佐郡院内町農協さんを訪問して、江熊組合長、えとう管理部長さんの話を取材して呉れませんか？”と、チッソ旭肥料(株)福岡営業所の小野さんから連絡があった。

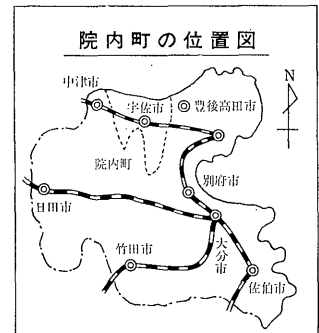
筆者は長い間、肥料業界の記者生活をしているが、7年間にもわたって、特定の会社の肥料だけで基肥の施肥設計をたて、更に今年からは追肥も同様の方針で推進するという事例は、これまで聞いたことがない。

時はよし桜(はな)の4月、そこで4月5日の夜行で西下、6日は12時30分頃、福岡営業所で小野さんと落合って花日和の九州路を飯塚、行橋を経て山国川を渡って大分県に入り、中津、宇佐から院内町に南下するという、車でじつに3時間半の長町場。さすがに昨夜の疲労が出てきたのか、思

わず眠気がきざしはじめた頃、“さあ、やっと来ましたよ”と小野さんの声がかかって、車は右へカーブをきって、院内町農業協同組合に着いた。

ここで江熊組合長、えとう管理部長から伺った院内町的水稻、麦作の基肥施肥設計の顛末を記す前に、まず院内町と院内町の農業概況を述べておこう。

別掲図でお分りのように、院内町は大分県の北西宇佐郡の西南端に位置し、東西10km、南北17.5km)東は安心院町、西は下毛郡本耶馬溪町、南は玖珠郡玖珠町、北は宇佐市に隣接する総面積114.66km<sup>2</sup>の山村地域である。



余川、院内川、日岳川、高並川などの河川が町を縦断する恵良川に合流し、恵良川はまた町の北端三つ又で津房川と合流して駅館川となって周防灘に注いでいる。

また、宇佐平野と九州の屋根と云われる九重山系に通ずる中間にあり、標高差のかなり著しい山村で、寒暖の差が大きく、恵良川並にその支流河川の流域に拓けた集落によって構成されている。

総面積114.66km<sup>2</sup>の大半は林野で8割を占め、耕地は五指をひろげたような形で流れる川に沿って、僅かな平地が点在するほかは、標高60mから500mに至るまで段階状に開かれている。

良質の杉や、椎茸の原木となる樺(くぬぎ)が産出するので、山林所得もあることはあるが、殆どの生産農家は米、麦の生産に依存しているため、水稻に対する生産意欲は非常に旺盛で、昔から良質な宇佐米(硬質米)の主産地として知られ

ている。

“そもその馴れ染め？ああ、当農協が水稻基肥に硫燐16号を決めた動機ですね…”と、えとうさんは首肯(うな)ずいて、次のように語った。

**うまい米がとれるのだが**

**単位収量がどうしても上らぬ**

“車で福岡からみえたとあればお判りのように、当町は米、麦栽培に依存する山村地帯であります。戦後わが国民経済の発展、生活の向上がもたらす食生活の変化は、必然的に米消費の伸び悩みを招き、このことは、一方では良質米栽培に切り換えのムードを促進する転機をもたらしたものの45年からは農業史上かつてない「米の生産調整」が実施されてきて、いまや農家、とくにわれわれのように米作に頼らざるを得ない地域の農家経済は、不況、不安におびやかされております。”



江熊三日男組合長



えとう勇管理部長

“これらの情勢に対処致しますため、まず昭和38年から種々の事業を策定致しまして、構造改善事業を進めますほか、将来の在るべき姿と致しまして、家畜の導入、良質の杉材並に椎茸栽培の原木としての樺材の栽植などをとり入れた“複合経営”を推進するなど致しまして、農家経済の向上、安定につとめております。

“話を米に戻します。食味の点で“うまい米”と申しますのは軟質米ではなくて硬質米です。この辺でうまいと云われる“宇佐米”の大半は、当院内町から産出される硬質米なのです。産米の70%から80%を自主流通米として、経済圏である北九州各市場へ出荷しております。ところが10a当りの収量動向をみますと、昭和初期から戦後の20年代までは僅か200kg、それが昭和30年代に入りましてようやく300kg台にのりは致しましたものの、その後は相変わらずパツとしない状態をたど



院内町農業協同組合の正面

っております。”

“ところが、ご承知のように30年代後半から稲作の栽培技術が格段と改善、向上されるようになりました。当町におきましても、38年から稲作施肥改善を強力に推進致しました結果、41年から始まりました「米づくり運動」の成果として、待望の400kgの大台に乗せることができました。われわれにとってこのことは、非常に感銘深いものでございました。その、施肥改善事業推進の第一着手として採り上げましたのが…”

基肥肥料の銘柄整理であり、選定であったと云う訳だ。すなわち、このときからチッソ旭肥料(株)の硫燐16号が、院内町管内の生産農家の皆さんの水稻基肥肥料として、既に7年の長きにわたってご奉仕する絆(きずな)が結ばれた奇縁であり、今年から追肥用に燐加安454号(14・5・14)が指定される結果にもつながるのだ。

**稲作には窒素もさることながら**

**りん酸の高い肥料を使ってみたら…。**

“なぜ院内町産米の単位収量が上らないのか、この点は、稲作を経営の根幹とするわれわれの一番の悩みでしたが、ちょうどその頃指導関係の或る方から、“稲の生産を上げるには、窒素もさることながら、りん酸と加里のバランスが高い化成肥料を使ってみたらどうか？”と示唆されましたのです。”

“そこで手始めに38年に高度化成2銘柄、普通化成2銘柄に整理してみた訳です。普通化成は「いも化成」と云われるもので、ご承知のように「普通化成」は吠に入っているという点で、農家には魅力があった訳です。それを更に39年には高度、普通化成ともそれぞれ1銘柄にしぼりましたうえ、40年から水稻の基肥用は硫燐16号1銘柄と

し、更に41年には麦も硫燐16号1本にしぼりまして、今日に及んでおる次第です。”

このような施肥合理化運動が、その後の単位当り収量にどのような影響を与えたであろうか？次の数字を見て頂ければお判りになると思う。

＜水稻10a当り収量＞

40年	444kg	44年	512kg
41年	464	45年	454
42年	476	46年	443
43年	448		

この上昇した10a当り収量は、県内でも高収地帯としての位置にあり、かつこの傾向はほぼ安定しつゝあると見てよい。(なお48年度の単位当り目標収量はクジュウ・日本晴570kg、レイホウ・ミネユタカ600kgで、この数字は普通移植、機械移植とも同じである。)

こういう訳で、院内町の水稲基肥施肥設計特にチッソ旭の硫燐16号1銘柄による推進は、大分県内でも注目的となり、各農協からの視察者も多いと云われているが、周辺の農協の中に、院内町農協と同じような施肥設計を推進する気運が現われつゝあるという事実は、特に感銘深いものがあった。つまり、硫燐16号は100%とまでは行かずともほぼ理想に近い肥料であった訳で、この点から硫燐16号は常に新しい肥料と云って差支えないだろう。

院内町の総農家戸数1,639戸の92%=1,500戸が、稲作農家だと云われる。そこで稲作の生産体制は、全町64の集落を90の生産班に分け(1班は10ないし15名)おのおの班長を置く。農協には組合長を会長とする稲作部会があり、会長以下15名の役員を中心に肥料、農薬などの生産資材の受註など、稲作の推進に当ることになっている。

48年度稲作施肥設計 (宇佐農業改良普及所, 病害虫防除所, 院内町役場, 経済連宇佐サービスセンター) 監修

区 分	品 種	目標 収量	基 肥		分けつ肥		穂 肥		晩期穂肥		成 分・量		
			肥 料・施用量	肥 料・施用量	肥 料・施用量	肥 料・施用量	肥 料・施用量	肥 料・施用量	N	P	K		
	苗代	kg	硫燐16号	kg		kg		kg		kg	0.7	1.4	1.4
普通 移植	本 田 用	クジュウ 日本晴	570	”	50		燐加安 454	20	(塩安)	5	8.9	11.0	12.8
		レイホウ ミネユタカ	600	”	50	硫燐16号	10	”	30	( ” )	8	12.2	13.5
機械 移植	本 田 用	クジュウ 日本晴	570	”	40		”	20	( ” )	5	7.9	9.0	10.8
		レイホウ ミネユタカ	600	”	40	硫燐16号	10	”	30	( ” )	8	11.2	11.5

基肥に珪カルを苗代に40kg, 本田に160kgを施用する。

これらの点について、えとう部長は

“いわゆる面積受註はやってはおりますが、ご承知のような施肥体系でありますので、現実として肥料に対する選択権はないということになりました。統制率は94%というところ。なお今年から穂肥にも燐加安454号を使うことになりましたが、そうすると加里の成分比が高くなりますので、若し晩期穂肥をやるような場合は塩安を品種に応じて普通移植、機械移植とも、それぞれ5kg, 8kg施用するようにしたのは、そういう含みがあるからです。”

来年から米を作ろうと云っても

休んだら急速に復活は無理

“ところがその米のことですが…”と、えとう部長は話をきって、

“ご承知のように45年から、われわれが考えもしなかった米の生産調整が実施されました。わが院内町も国の大方針にご協力の意味から、45年は86ha, 46年には131ha, 47年には更に200haとなり、48年度にも120haの水田を休耕致しました。農家一院内町のような、いわば過疎地帯の農家が、生活を支える唯一の収入源の生産を規制されたことは、精神的にも、経済的にも大きな不安で、生活に与えた影響は非常に深刻なものが有ります。以後、日雇や、出稼ぎなどが急増致しまして、正直云って米作農家の意欲は確かに落ちておりますよ…”

“もちろん休耕に伴う対策は、この町でもそれこそ懸命に推進致しました。幸い当初の休耕地は主として山寄りの水田、或いは山の中の狭小な田でありましたので、山林開発の形で比較的的苦勞せずに吸収することができました。最近農協が中心となって、グリーンピース、ニンニク、抑制キ

ユウリなどの栽培をはじめておりますが、案外の効果が現われております。が、一般に普及するのはまだ時日を要すると思います。休耕した田はどうかーとはよく訊かれる質問ですが、現在休耕中の120haのうち、水田に復活可能なのは40ha、あと80haは林地或は果樹に切換えるより仕方がないと思っております…。今年からまた300haの構造改善事業がはじまります。これは県営圃場整備事業で、近代化資金6千万円、大型機械設備資金6千万円合計1億2千万円ですが、構造改善事業というものが農業の労働生産性を高めることは事実ですが、では個々の農家の生産のプラスに直接的につながるかと云うと、そうは云いきれない。とにかく、休耕しておって、サア来年からまた米を作るんだと云っても、そう簡単ではないのです。”

と語る、えとう部長の面(おもて)は柔和だが、言葉はきびしい。

去る3月30日公表された47年度の“農業白書”は、その結びで“わが国の農業は、生産の減退や農産物価格の停滞などによる農業所得の伸び悩み、兼業農家の増大、自立経営農家の減少など生産、価格、構造の各面で極めて困難な問題に直面し、加えて農産物の国際需給のひっ迫、国際通貨体制の動揺など、激動する国際政治経済への対処にも迫られるなど、これまで経験したことのない局面に立たされている。”と云い、だから、

“このような状況の中で、適切な国土利用計画のもとに国民食糧の安定供給を果しながら、農業従事者の所得と生活水準の向上を確保していくことが、今日のわが国農業の課題となっている。”と結んでいるが、記者が現場で得た感触では、

“農業の将来、農政の在り方というものは、作文では解決されないこと、国際的な食糧のひっ迫を訴えながら、米を増産しろというのか、しなくても良いのか、それらを含めた具体策を“農民よ、お前も考えよ”と云う前に、政府が対策を打ち出すべきではないのか。”

ということであった。

“わしも米を70a作っとりますよ、米を作っとらんで組合長は勤まらんからなあ、それにしてもあんだ、これからの農業はいよいよむずかしうなるなあ”という江熊組合長の発言は、短いながらこの場合非常に説得力があった。



硫磷16号の山(農協サービスセンターで)

ストックは本所に一括して

整調・確認できる合理的な運営体制

組合長が所用で中座された機会に、ここから程近い院内町農協のサービスセンターを訪れた。ここには農協で取扱っているいろいろな品物が陳列されており、向って左側の倉庫には肥料が山積みされてある。もちろんチツ旭肥料の硫磷16号。そこでパチリと1枚とったのが別掲の写真。

“なるほど…”という感じが浮かんできた。

“ご覧のようにここは肥料のストック・ポイントですが、この農協の特徴は、管内に何カ所もある支所には、肥料がどうしても必要だーという時期以外は、在庫は全部ここに置いているということです。銘柄が1社製品に統一されていることもあって、在庫の調整に気を使うこともないし、現品の状態が常に確認できる…、本当に合理的な方法だと思いますね…”と小野さん。

管内全部の在庫量とその状態が、常に本所で把握されているということ…確かに賢名な方法だと思った。

編集の関係で、これ以上筆を進める訳に行かないが、現地を訪問して非常に愉快だったことは、水稻と麦作の追肥用に新に燐加安454号が、桑用肥料として硫磷13号(14・10・13)が、更に一般野菜用肥料としてCDUS555(15・15・15)が追加指定されたということであった。

あ と が き 柳、桜をこきまぜて…という春もアツという間に過ぎて、ときは5月、初夏の訪れだ。稲作に忙しくなるときだ。5月号をお届けします。

なお、編集の都合上、藤原先生の玉稿を8ポイント活字を使用致しました。ご了承をお願いするとともに、幾重にもお詫び申し上げます。(K生)